

デンマーク絶対王制後期の社会政策に関する基礎研究 (1)

—クリスチャン7世治世(1766-1808年)を中心に(上)—

佐保吉一

Fundamental Study on the Danish Absolute Monarchy in the Period of Latter Term (1)

—Focused on Christian VII's Social Policies (Part 1)—

SAHO Yoshikazu

Abstract

The objective of this paper is to examine the social policies of the Danish Absolute Monarchy's latter period, with a particular focus on King Christian VII's initial tenure (1766-1772).

Christian VII (1766-1808), son of Frederik V, ascended the throne at the age of 17. He was subsequently married to his cousin, Caroline Mathilde (1751-1755), whose brother was the English king George III. As a result of his mental illness, Christian VII was unable to effectively govern the country. Consequently, the German court physician J.F. Struensee (1737-1772) proceeded to assume control of the political apparatus. Struensee was offered a permanent position as court physician during the royal tour in late 1768. This position, coupled with the growing intimacy with the lonely Queen Caroline Mathilde, afforded Struensee considerable potential power. He initially dismissed the king's favourites and political opponents. In December 1770, he abolished the Royal Council and in July 1771, he became royal secretary at the cabinet of the king, thereby enabling him to sign documents in the name of the now incapacitated king. Over the course of 16 months, he had dictated the internal policy of the Danish government through a flood of cabinet orders. Struensee sought to modernise Danish public administration and society. His most significant reforms are as follows:

- 1) The practice of torture and the death penalty for a number of offences (such as infanticide) were abolished.
- 2) Illegitimate children were granted the same rights as legitimate.
- 3) The censorship of the press was abolished.

4) Several religious holidays were abolished.

5) The practice of preferring nobles for state offices was abolished.

In the early morning of 17 January 1772, Struensee and his associate Brandt were apprehended in their beds. Following a hastily convened trial, they were convicted of high treason and subsequently executed in a manner that was perceived to be particularly brutal. Subsequently, the Queen was arrested and the marriage was dissolved. Caroline Mathilde was relocated to Celle in Hannover, where she died of an epidemic a few years later.

Struensee's reforms were Enlightenment-inspired and conducive to the modernisation of Denmark. However, he was a foreigner (German) and his reforms were implemented too rapidly and in too short a time to be fully adopted. It could be argued that he was perhaps ahead of his time to a greater extent than was prudent. Ultimately, he ascended to the role of head of the king's cabinet, thereby acquiring a degree of authority commensurate with that of an absolute monarch. This form of government is characterised as a "cabinet-led absolute monarchy".

0. はじめに

デンマーク絶対王制中期の最後を飾った国王フレデリック Frederik 5 世(在位:1746-66 年)は慢性アルコール依存症で、例外的にモルトケ A.G. Moltke を中心とする顧問達が政務を取り仕切ったが、次のクリスチャン Christian 7 世(在位:1766-1808 年)はさらに重篤なケースで、精神疾患¹のためまともな政務を執ることは不可能であった。ある意味常軌を逸した国王であった。このようにデンマークでは 2 代続けて通常の政務を執れない国王が続き、その絶対的な権力を代わりに執行する者が登場する。それがフレデリック 5 世の場合はモルトケであり、クリスチャン 7 世時代では本稿で取り上げるドイツ人医師ストルーエンセ J.F. Struensee (1737-1772) である。デンマークの絶対王制においては国王が疾病罹患等の理由で政務不能に陥った際の規定は、想定外であったため国王の権利や役割が記された国王法(1665 年)やデンマーク法(1683)には規定されておらず、政務遂行が不可能になった国王が登場する度に新たな権力代行執行者が登場するのであった。

本稿からは前稿を引き継いでデンマーク絶対王制「後期」における社会政策の考察を行うため、まず最初にデンマーク絶対王制自体、そして絶対王制後期の特徴を概観した上で、クリスチャン 7 世の治世初期(1766-1772 年)を中心にみていきたい。

1. デンマーク絶対王制の特徴と絶対王制後期という時代

1-1 デンマーク絶対王制

デンマーク絶対王制はスウェーデンとの 2 回にわたるカール・グスタヴ戦争(第 1 次:1657-58、

第2次：1658-60)の戦後復興の中で開催された身分制議会で、聖職者・市民が共同するなか、国の根本である王制の形が急速に変化し、それまでの選挙王制から世襲王制が成立したのである(1660年10月)。そしてその数ヶ月後に社会契約的な絶対王制が特段の異論もなく、基本文書を回覧するという形で成立した。そしてこの絶対王制は、①前期(確立期ともいえる：1661-1699年²⁾、②中期(1699-1766年³⁾、③後期(1766-1848年)の3期に分類できる。前期は、絶対王制を導入したフレデリック3世そして土台を築いたクリスチャン5世の時代である。まず、1665年にはデンマーク絶対王制を規定した『国王法』が制定されている。そして税徴収の基となる度量衡が統一され、検地をもとにした土地登録も実施されている。また新しい政治体制である絶対王制下の社会を規定するために1683年に『デンマーク法』が制定された⁴⁾。続く中期は、フレデリック4世(在位：1699-1730年)、クリスチャン6世(在位：1730-46年)、フレデリック5世(在位：1746-66年)が統治を行なった時代である。大北方戦争を経験してその影響を強く受けるが、その後は平和が保たれ、商業が発展した時代で、国王の統治に関して様々な形態が登場した時代でもあった。

1-2 デンマーク絶対王制後期

そして今回取り上げる絶対王制後期は、3人の絶対王すなわちクリスチャン7世(在位：1766-1808年)、フレデリック6世(在位：1808-39年)、クリスチャン8世(在位：1839-48年)が統治をした時代であった⁵⁾。18世紀後半は、1720年に終結した大北方戦争からデンマークはようやく立ち直り、中立政策のもと小国の強みを生かして商業繁栄時代を迎えていた。しかし、フランス革命やナポレオンの登場など、国際関係が複雑化する中でデンマーク絶対王制は激動の時代を経験する。大局的にみると、これまで北欧内、特にバルト海地域内の国際関係のみに気を配ればよかったのだが、18世紀後半における英仏の対立に巻き込まれて以来、両大国の動きに国の存亡が左右されることになる。その中でクリスチャン7世は前述のように精神的な病を抱え、政務には不適であった。統治の初期にはドイツ人医師のストルーエンセが侍医としての立場を利用して独裁的な権力を掌握し、矢継ぎ早な改革を行なった。しかし、1772年に反対派によるクーデターが発生し、神学者グルベア Ove Høegh-Guldberg(1731-1808)を中心とする保守派が、前政権の政策を悉く否定する反動政治を展開した。当時のヨーロッパでは啓蒙思想が広がり、開明的な君主が様々な改革を試みていたが、デンマークではそれとは真逆な事態が起こっていた。そのような状況下、王太子フレデリック(後のフレデリック6世)は1784年に、有能なドイツ系官僚と共にクーデターを敢行し、新政権を樹立させた。王太子フレデリックは精神疾患を患った父王に代わり、実質的に長年にわたって国王職を代行する。優秀な大臣達の助けを借りて啓蒙主義的な改革を断行し、国民にも人気が高かった。だがフランス革命のさらなる進展とともに次第に保守反動化していき、1799年には検閲制を強化している。この政権下で1784年以降、デンマークの近代化を推進する種々の改革が実施されるが、その代表例が農業及び農民に関する改革であった。なかでも意義深いのが、それまで出生農地に縛られていた農民男子が移動の自由を得ることになった土地緊縛制廃止(1788年)である⁶⁾。また植民地での黒人奴隷貿易を禁止する勅令も、世界に先駆けて1792年に公布されている⁷⁾。フ

ランス革命前後まではデンマークの改革時代とも評せる。

そして18世紀末まで中立を守って利益を享受してきたデンマークは、外相A.P.ベアンストーフ亡き後、刻々と変化、複雑化する国際情勢のなかでの舵取りは困難を極めた。英国のコペンハーゲン砲撃を受けて、国王フレデリック6世が深慮せずナポレオン側に付いたため、結果的に敗北を喫し、長年の同君連合王国ノルウェーをスウェーデンに割譲するなど領土が大幅に縮小されることになった。その後約30年にわたる経済的困難を経験する中、政治的には自由主義運動が高まり、約180年ぶりに身分制地方議会が開催されたりしている⁸。但し絶対王制自体に異を唱える者には厳しく対処した⁹。なお、フレデリック6世は国民、特に農民からの人気絶大で、葬列でも彼らが一部の区間国王の棺を運んでいる。社会面では早くも1814年に義務教育制度が導入されている。そして文化面では「黄金時代」と呼ばれる時代を迎え、世界的にも知られる童話作家アンデルセン、哲学者キェルケゴール、彫刻家トーヴァルセンなどが活躍した。

フレデリック6世には男子の跡継ぎがおらず、従弟のクリスチャンがクリスチャン8世として王位を継承した。彼は若き日にノルウェー総督を務め、自由主義に基づいたアイズヴォル憲法を承認し、一時ノルウェーの国王にも就任したことがある。この経歴からデンマークにおける自由主義憲法制定にも理解があるだろうと人々から期待されたが、年齢を重ねると共に保守的になったため、その期待は裏切られることになった。そして、デンマークの歴史転換点となる1848年の初頭に急逝してしまった。一方でクリスチャン8世の在位中に経済は回復し、国内最初の鉄道開通、ビール会社カールスベアの創業、チボリ公園の開園、国民高等学校の創設など時代の新しい動きが垣間見られた。

そして、このクリスチャン8世の死後、フランス2月革命が勃発し、その影響が欧州全土に波及した。デンマーク国内でも自由主義に基づく憲法制定の要求が高まる中、首都コペンハーゲンでは様々な集会が開催された。そのような中、1848年3月21日、王宮に向けて自由主義憲法を求める市民行進が実施され、市民代表と面会した新国王フレデリック7世は、自由主義派の市民を閣僚に入れることを約束した。これによって約190年間続いた絶対主義の王制は無血で終わりを迎えたのである。それも他国のように流血を見ず、平和裡にである。そして、1849年6月に自由主義憲法が制定され、デンマークは立憲君主国となった。

2. クリスチャン7世と統治初期

2-1 即位前

王太子クリスチャン（後のクリスチャン7世）は、フレデリック5世と英国生まれのルイセ王妃との間に1749年に誕生した第4子であるが、僅か2歳前後で、母親を亡くし、6歳頃までは宮廷の女性に囲まれて暮らした。父の再婚相手である義母ユリアナ・マリエ Juliana Marie(1729-1796)は自分の子どもである推定王位相続人フレデリック arveprins Frederik (1753-1805、以後「王太子フレデリック」と略)の育児で忙しく、王太子クリスチャンは二の次であった。

クリスチャンは6歳になって自身の小姓 kammerpager を得て、担当の侍従長 hofmester に

はホルシュタイン出身のドイツ系貴族ディトレウ・レーヴェントロウ **Ditlev Reventlow** が任命された。彼は次期国王を養育するという気概と計画はなく、王太子を犬 **hund** のように扱ったといわれている¹⁰。彼は王太子に対して、ことあるごとに体罰を行ったり、皆の前で恥をかかせた。これに異を唱える者もいたが、侍従長は絶大な権力を有しており、逆らうことは困難であったうえに、当時は体罰が普通に行われていたのであった。宮廷では4歳年上のいとこのカール **Carl** とよく遊んだ。

また、王太子の養育に関しては、レーヴェントロウが1人で担当したわけではなく、初期には宮廷官吏のニールセン **Georg Nielsen** も関与し、ドイツ語、デンマーク語、ラテン語、さらにはフランス語、歴史、聖書も教授された。座学の他には乗馬、フェンシング、ダンスのレッスンもあった。クリスチャンは特に舞踏会が気に入り、7歳の時には自身の舞踏会も開催している。1760年よりスイス人のレヴェルディール **Élie Reverdil**¹¹が養育に関わる。彼は当時流行していた啓蒙思想の影響を受けた自由主義者でもあった。彼は王太子クリスチャンと関わる中で、王太子の精神的な病には気づいていた。さらに、10代の若者としてクリスチャン王太子は「不幸な習慣 **ulykkelig vane**¹²」として自慰を頻繁に行うようになった。1765年、16歳の誕生日に堅信式を迎え、いところで2歳年下の英国王女カロリーネ・マチルデ¹³ **Caroline Mathilde**(1751-1775)と婚約をした。

2-2 即位後

1766年1月14日、デンマーク国王フレデリック5世がクリスチャンスポー城で死去し、同日枢密院メンバーの最年長者であったベアンストーフ **J.H.E. Bernstorff**(1712-72)が城のバルコニーで、当時僅か17歳であった王太子クリスチャンがクリスチャン7世として王位を継承したことを宣言した。

2-2-1 王位継承後の人事と婚姻

ストルーエンセが1770年に実権を握るまでの約4年間、政権の人事は入れ替えが頻繁に実施され、父王フレデリック5世時代との継続性は薄い。その背景には精神的な病のため気分が不安定で政務に適さない国王自身とその彼を利用して権力を行使しようとした者とのせめぎ合いがあった¹⁴。例えば父王のお気に入りだったモルトケは即位後更迭された¹⁵が、2年後には枢密院のメンバーとして呼び戻されている。また、21歳の従弟 **svor** のヘッセン公カールや遠縁のダンネスキョルド＝サムスーエ **Frederik Dannekiold-Samsøe** は大臣に任命されたが、短期間で罷免されている。

その一方で父王時代からの有力大臣3名だけはそのまま留任させている。その3名とは、ドイツ官房の長で外相役の **J.H.E.ベアンストーフ**、デンマーク官房の長であるソット **Otto Thott**、自身の養育係でもあり財務担当のレーヴェントロウ **Ditlev Reventlow** である。

新国王は始め期待を担っていたが、途中から私生活において夜コペンハーゲン市内で酔っ払ったり、蛮行を働いたり、喧嘩をしたりするようになった。一方で、権謀術数がうごめく宮廷のなかで、クリスチャン7世は独自性を発揮し、身分に拘わらず自分が面白い **morsomt** と思

う人物を食事等に招いている。なかでも演劇に関心を示し、クリスチャンスポー宮殿の厩舎建物に劇場を開設し、フランス人の劇団を雇用し、さらには自らも劇に出演している¹⁶。

宮廷では国王を早く結婚させて落ち着かせようということになり、即位した年の秋に婚約中であった英国王ジョージ 3 世の妹のカロリーネ・マチルデと正式に結婚した。婚礼式は 11 月にクリスチャンスポー城で挙行された。

しかし、早々に期待は裏切られている。1767 年夏に、国王は王妃抜きでホルシュタインに遊びに行き、現地では売春婦たちとの遊興に勤しんだ。また同年秋頃には、舞踏会や仮面舞踏会に飽きた国王は、貴族の友人や宮廷の下僕を引き連れて連夜コペンハーゲン市内に出発し、器物を損壊するなど狼藉をはたらいた。常軌を逸した行状で、夜警や警察の世話になり、世間にもそのような噂が流出した。国王はその蛮行の際の怪我を誇らしげに見せたという¹⁷。

最悪なのは町でも名うての高級売春婦であるカトリーネ Anne Katrine Bengthagen¹⁸と付き合い始めたことである。彼女は悪党どもを指揮して、他の売春宿を襲撃したりした。国王は彼女の家でくつろぎ、酔っ払うまで深酒した。翌朝城に帰る際には不良少年達に嘲笑され、よろめきながら城に戻ることもたびたびであった¹⁹。余りにも国王の放蕩が激しいため、1768 年 1 月には国王が書類にしぶしぶ署名させられて、カトリーネはハンブルグの矯正施設に強制収容され、以後コペンハーゲンに戻ってくることはなかった。これは国王にとっては大変気落ちのすることであり、1 月末に長子のフレデリック王太子が生まれても癒やしとはならなかった。

この頃、国王は長年自身の家庭教師を務めたレヴェルディールとも離されてしまう。彼は国王の精神を落ち着かせる特別な能力を有した人物であるにも関わらずである。さらに侍従であったスペリング Sperling もホルシュタインに遠ざけられた。また、王妃マチルダも頼りにしていた女官長のフォン・プレッセン Louise von Plessen 伯爵夫人とも離されることになった。全ては反対派が仕組んだものであった²⁰。

上記のこともあり、国王の気分を転換させるために外国訪問が企画されることになる。王妃は出産したばかりなので同行しないことになった。

2-3 ヨーロッパ大陸大旅行

企画された旅行は約 80 名でイギリス、フランス、オランダ、ドイツを 7 ヶ月かけて訪問するという大旅行であった。国王はイタリア・ロシアへの訪問も希望したが、最終的には先の 4 ヶ国を訪れることになった。その際旅行に帯同したのが、後に国王の力を借りてデンマーク政治の実権を掌握することになるドイツ人医師ストルーエンセであった。ここでまずストルーエンセについて述べておきたい。

本名はヨハン・フリードリッヒ・ストルーエンセ Johann Friedrich Struensee といい、1737 年北ドイツの都市ハレで誕生した。父親は敬虔主義派の神学教授であった。20 歳で医学博士号を取得し、以後 10 年間、デンマーク領でもあったアルトナで医師として勤務した。アルトナでの市医 stadfysikus という職はデンマークの外相 J.H.E. ベアンストーフを通じて得たものであった²¹。町では医学に関する論争に参加し、観察眼・批判的感覚を身に付けている。町の急進的な啓蒙主義環境にも影響を受け、ルソーやヴォルテールの考えに触れ、既存の体制

に対する批判力を高めていった。そして、パニング David Panning²²という友人と共に月刊誌“Zum Nutzen und Vergnügen (『利益と楽しみのために』)”を発行している。同誌には娯楽や啓蒙的な記事も掲載されていたが、結局経済的利益は生まれず、名声も得ることが出来なかった。最終的には中傷のかどで当局によって発行停止とされたため、言論の自由（出版の自由）についてはその重要性を認識したと思われる。

1768年には懇意であったデンマークの貴族で軍人・政治家ランツァウ Schack C. Rantzau-Ascheberg(1717-89)を通じて自らをクリスチャン7世の旅行の際の同伴医となることが出来るように依頼し²³、それが実現したのであった。

大旅行は1768年5月からドイツはホルシュタインを皮切りに始まる。王妃も同行しない一見お忍びの旅でもあり、ホルシュタインでクリスチャン7世は以前付き合っていたカトリーナに再会している。次にオランダ、そして英国を訪問した。英国は王妃の実家があるところでもあり、一同国王の行状を心配したが相手側を落胆させるような事態は発生しなかった。旅行中は宮廷長官で国王お気に入りのホルク Conrad Holckが国王の娯楽を担当し、国王と過ごす時間も長くなった。一方ストルーエンセは旅行期間中、国王の空想や妄想に丁寧な耳を傾け、真剣に向きあったため、国王の信頼を獲得していった。

フランスに到着したのはコペンハーゲンを出て4ヶ月後でパリに約1ヶ月半滞在している。クリスチャン7世は夜も余り睡眠をとらず、娯楽に興じた。ある機会にはディオドロをはじめフランスを代表する知性にも会っている²⁴。パリ滞在中、国王は専ら仮面舞踏会、狩猟、観劇で時間を過ごした。そしてフランスを発つ前に、国王はストルーエンセを侍医に指名したのであった。周囲の者は一応、国王と部下という(上下)関係であったが、ストルーエンセの場合は、立場が患者と医師という特別な間柄なのであった。

一行は1769年1月にコペンハーゲンに戻ってきた。ストルーエンセは称号 *Etatsråd*²⁵を得て、宮廷への出入りも許され、クリスチャンスポー城に隣接する宮殿 *Prinsens palæ* に居住した。国王一行の帰国後、外相ペアンストーフは今回の旅行が外交的にも国王の名声を広めることが出来てよかったと述べている²⁶ように、当初危惧された国王が醜態をさらすような事態は発生せず、成功だったといえる。そしてその功績は何といても国王の随行医であったストルーエンセのものであり、彼の立場も急上昇したのである。

さて帰国後は国王の勧めでストルーエンセは当時健康状態が優れなかった王妃カロリーネ・マチルデを診察し、運動療法を勧めた。特に乗馬を推奨したが、当時女性は馬には乗らないのが普通で、そのなかで王妃が乗馬を始めたため、世間の注目を浴びるとともに批判・怒りも集まることになった。王妃は当初、ストルーエンセのことをよく思っていなかったが、この運動療法が成功したこと、ストルーエンセが実施した王太子への種痘が成功したこと、さらには国王の精神状態が悪く疎まれていることがあり、以後次第に彼との親密さが増していった。

一方、国王は旅行後ピアギッテ Birgitte Sofie Gabel という美しい宮廷女官 *hofdame* と付き合ったが、その彼女が1769年8月に急死してしまった。その後はゴウトマン Goutmand と名付けたグレートデーン犬を可愛がり、翌年にはその犬に称号 *konferensråd*²⁷を与えて、自分の

六頭立て馬車に乗せて運んだりした。なお、ストルーエンセの見立てでは、当時は過度な自慰行為が国王の肉体的・精神的問題を引き起こしているのであった。そして、1770年初頃より、王妃とストルーエンセの関係がさらに深まり、愛人関係に発展していた²⁸。また5月には国王御進講係 *kongelig forelæser* に任命され、称号 *konferansråd* を得ている。

そして1770年夏には、国王が首都を離れてユトランド半島南部のホルシュタインに滞在することになった。宮廷や大臣からも離れて、ある意味において国王を人質に取って孤立させた形で、ストルーエンセはいよいよ権力固めを開始するのである。彼の手段は国王の私的秘書室であるキャビネット *kabinet* から、例えば枢密院で国王が大臣や省庁トップの意見を聞いて決定するのではなく、キャビネットから直接命令を出す、いわゆるキャビネット令 *kabinetsorder* であった。フランスのルイ14世、15世はそのような形で統治をしたが、そのような形式の絶対主義はデンマーク史では初めてのことであった²⁹。

2-4 即位後の農民政策

クリスチャン7世の王位継承後まもなく政府内でも農民解放等農民関係についての話題が登場するなど、改革への兆しが見え始める。まず1767年、スイス人で国王の家庭教師、個人秘書官でもあったレベルディールが奴隷的農民の解放を望む³⁰という農民階層に関する意見を公表した。だが、その中において「農民解放」はさほど強調されていなかった。これに対して軍部（陸軍）を代表するフランス人将軍(軍事顧問)サン・ジェルマン *Claude Louis de Saint-Germain* は一挙に民兵徴集制と土地緊縛制の両制度を廃止してしまおうという、思い切った計画を明らかにすると同時に、新しい農業委員会の設置を要求した³¹。また同じく1767年、官房法務長官 H・スタンペ *Stampe* が穏健な内容の農民解放提案を行なった。彼の提案は次の場合に土地に緊縛された農民を解放する(土地緊縛制廃止)というものであった³²。

- (1) 6年間連隊に勤務済みの者
- (2) 地主が、ある兵役従事者の代わりに他の兵役適格者を供出する場合³³
- (3) 兵役終了者
- (4) 年齢が37歳以上の者(14-36歳の者だけが予備役名簿に登録される)

このスタンペ提案は内容的には斬新ではなく、保守的な部類に入るが、1788年の土地緊縛制廃止に向けての議論の中で参考にされたり、間接的に農民を土地緊縛から解放する土地緊縛廃止勅令に盛り込まれた部分もあるなど、意義深いものである。

さらに同じ1767年の10月27日、新しい「農業委員会 *landvæsenskommission*」が設置された。その設置目的は「デンマークにおける農業を改善・発展させる為に役立つ全ての事柄を調査・検討する。その際、特に可能な限り農民の置かれた状況を緩和することを考慮に入れる³⁴」ということであった。委員会の中心メンバーは農民問題や農業問題について発言してきたスタンペやレヴェルディールであった。なお、この1767年の委員会と1757年の委員会の差異は1757年の委員会はその目的があくまでも経済に関することだけであったが、今回の委員会では、その目的の中に「農民の置かれた状況」という社会的なものも含まれていたことに

ある。これは当時普及しつつあった啓蒙思想の影響をうけてのことだと考えられる。

ところでこの1767年の農業委員会が設置される10日前に委員会設置説明が行われたが、その折「農民解放」に関しての言及はなく、また委員会の初会合でもその問題については特に何も意見が示されなかった³⁵。これは委員会メンバーの大半が貴族や大地主であったこととも関係していたと思われ、例えばH.ローゼンクランツのような保守政治家は「土地緊縛制廃止に関する全ての話は国益に反する³⁶」という考えを表明していた程である。そのような折、1767年10月21日、法務官でコペンハーゲンの一代官であったO. ブルーンは国王の要請により、農業と農民階級の自由に関する覚書条項を上表したが、そこでは条件付き土地緊縛制廃止（農民解放）が提案されていた³⁷。

以上のように、1767年を中心に賛否両論あるものの、農民解放自体に関する議論が初めて活発になってきたのである。なお、先の1767年の農業委員会は5ヶ月後に「農業省 General-landvæsnettskollegiet」と名前を変え、組織も強化された。権利的にも、王国官房を通さず直接国王に報告・提案等を行えるという大きな特権も得ていた。しかし、結果的に農業省は農民解放に関しては何も方策を打ち出せないうちにストルーエンセ時代を迎え、1770年11月に廃止されてしまうのであった。

さて、1769年には政府の主導で「王立農業協会 Det kongelige danske Landhus-
holdningsselskab」が設立されている。この協会は賞を授与することで農業の経済的・技術的發展を目指した団体で、その意味では『デンマーク・ノルウェー経済雑誌（1757-64）』の拡大版ともいえるものである。初代会長は外相 J.H.E.ベアンストーフで、協会の会員には役人、改革賛成派地主、学者、商人等が多く、1770年には約200人を数えた。この会員の中に後の農民解放実現の立役者であるレーヴェントロウ C.D.F. Reventlow とコルビョルンセン Colbjørnsen が含まれていた。初期の王立農業協会の賞は、村落共同体の廃止、クローバーの導入、排水など農業技術関係の論文に与えられていたが、1781年にはグルベアの保守反動政治下にもかかわらず、協会の金賞が所有地内の農民の大部分に土地所有権または世襲小作制を認めた地主に贈られている。これは協会の関心が農民及びその社会的関係にまで及んだことを示している。王立農業協会は現在に至るまで存続しているが、その当時果たした役割、つまり農業・農民問題に関する議論や出版を盛んにしたという役割は極めて大きなものがあったといえる。

3. ストルーエンセの時代（1770-1772）

3-1 権力への道程（権力掌握過程）

3-1-1 ホルシュタイン滞在（1770年夏）

1770年夏、国王夫妻はホルシュタインに赴いた³⁸。首都から離れた場所で着々とストルーエンセの権力固めが始まる。まずは宮廷・キャビネットからである。ストルーエンセと王妃は国王のお気に入りである。彼のお供だった宮廷長官ホルクを遠ざけることに成功し、次にその職をも奪った。彼の代わりにストルーエンセの友人のブランド Enevold Brandt（1738-1772）が登

用された。彼自身は以前ホルクの悪口を言ったかどで、宮廷から追放されていた身であった。

ここで後に友人のストルーエンセと過酷な運命を共にすることになるブラントについて少し述べておきたい。ブラントはデンマーク生まれの宮廷人で若い頃にフランスに遊学し、啓蒙主義的な雰囲気を味わっている。ストルーエンセとはアルトナ時代に面識を得ている。ブラントはストルーエンセのおかげで再度宮廷入りしてからは、国王の娯楽や衣装を担当し、さらには日常生活全般における面倒をみていたが、時には精神的な病のため普通ではない国王とトラブルも起こしている。例えばあるとき、国王がブラントの頭に檸檬を塗りつけたことがあり、その件で最終的にはもみ合い、さらには取っ組み合いの喧嘩になり、ブラントが最後には王の指を咬んで出血したのであった。それ以来、国王はブラントに対して極度に恐れをいだくようになったのである³⁹。

なお、このホルシュタインでの滞在は、少人数で家族的な雰囲気で終始したため、国王の病状には概してよい影響を与えたのであった。

ホルシュタインへの旅行から戻った1770年9月4日、ストルーエンセは国王に2つの重要なキャビネット令に署名させた。一つは位階 *rang og orden* は家柄・血筋やコネではなく、忠誠心と能力によって授与されることになるというもので、もう一つは後に詳しく考察する「検閲の廃止」であった。突如、事前の検閲なしに、誰が何を書いて出版してもよいことになったのである。誰もがその背後にストルーエンセがいたことは承知していた⁴⁰。そして出版の自由に関しては10日後の9月14日に勅令として国民に対して公布されている(*Forordningen af d.14 September*)。

これらの法令が公布された後、宮廷はコペンハーゲンの北約25キロメートルに位置するヒアスホルム *Hørsholm* 城に移った。ここはクリスチャン6世の王妃ソフィエ・マグダレーネが愛した城で、ここでいよいよストルーエンセの本格的な足固めが行われ、政敵の排除が開始される。クリスチャン7世は書簡をしたため、長年外相を務めてデンマークの中立を築き維持してきたベアnstーフを罷免したのであった。そして彼の全ての職をも解いた⁴¹。もちろんこの決定の背後にはストルーエンセがいた。ベアnstーフと入れ替えにストルーエンセは、ランツァウを復権させコペンハーゲンに呼び戻している。彼とはアルトナ時代に知遇を得、国王の随行医となる機会を与えてくれた人物でもあった。

今回の人事は、首都から少し離れた場所であるからこそ、このような重要案件を相手の反応を見ることなく行えたのであろう。このことを契機に、デンマークの政治システムが足早にしかも大きく変更されていく。

この後宮廷はようやくクリスチャンスポー城に戻ってきた。この時に国王は完全にストルーエンセと王妃に支配されている状況であった。ストルーエンセは国王を他人より分離・孤立させるために、王位継承権を有する王太弟フレデリックを王宮から切り離そうとして、母である皇太后ユリアナ・マリエの不興・怒りを買うことになる⁴²。

そして1770年12月初旬には実質的に枢密院も解散され、大臣や省庁のトップが対面で国王に奏上する機会が失われてしまった⁴³。これまでは国王の身近に誰が居ようが、システムとして枢密院が機能していたのであるが、これが消滅したのである。つまりストルーエンセの

計略により、クリスチャン7世は、実質的に干渉を受けることのない、これまでのどの絶対王よりも絶対的な、無制限の絶対王権を握ることになったのである。そしてそれは皆が追い求めた究極、最強の統治形態でもあった。ただ、彼は精神的な病のため統治不能なのであった。

12月27日には正式に枢密院が廃止され、これによって全ての権力が、ストルーエンセが属するキャビネットに集中することとなった。さらに国王に忠実に仕えてきた宮廷貴族 *kammerherre* のヴァーンステッツ *Warnstedt* も更迭された。そしてストルーエンセは、キャビネットにおける自身の地位を向上させることで、独裁権力への道により近づいていく。また1771年の早い時期に自身をキャビネット文書秘書官 *maitres des requêtes* に任命させ、国王に渡る全文書 *ansøninger* を読み上げる役割をキャビネット秘書官のシューマッカ *Andreas Schumacher* より奪っている⁴⁴。これで国王に渡たる行政文書等全ての情報を握ることになったのである。

この頃国王の精神状態は悪化し、ストルーエンセが国王と接する者にどう対応すべきかを指導するほどであった。黒人少年のモランティと少年ヨーアンの二人が国王の親密な友人となり、同じベッドで寝起きも共にしている⁴⁵。

3-1-2 ヒアスホルム城滞在 (1771年夏)

1771年6月には限られた人数で宮廷がヒアスホルム城に移動した。その最大の理由が王妃カロリーネ・マチルデの出産であった。彼女は7月7日、後にルイセ・アウグスタ *Louise-Augusta* と呼ばれる女兒を出産し、それがストルーエンセとの子どもであることを誰も疑わなかった⁴⁶。

この直後ストルーエンセは自身を枢密キャビネット大臣 *gehimekabinetminister* に任命し、国王の署名なしにキャビネット令を出せるようになった。この時点で彼は政務不能の国王を差しおいて、デンマークの独裁者になったのである。彼のキャビネット令は内容が行政組織、財政政策、刑法(改正)、そして社会政策に関わるものが大半であった(改革の内容に関しては次節で詳しく考察する)。さらに彼は地位に相応しい身分も獲得している。7月22日に举行された王女ルイセ・アウグスタの洗礼式にはブランドと共に伯爵 *lensgrev* の身分で参列したのである。

一方で国王クリスチャン7世の精神状態や行動はさらに悪化していたため、心を平穏に保たせるために、昔の家庭教師で古い友人でもあった、スイス人のレヴェルディールを呼び戻すことになった。この背景にはストルーエンセ自身は改革を実施するために多忙で、十分国王の治療や世話を行えなかったことがある。一方国王は相変わらず二人の少年たちと器物損壊を続けており、その行為を通じて国王自身が傷つくことを恐れて、監視が厳しくされると共に、薬も処方されている⁴⁷。

国王との面会に関しても、ストルーエンセが上手に立ち回って国王を隔離し、2人の少年、レヴェルディール他何人か親しい者のみが面会できるようにしていた。

このようにストルーエンセが首都から離れたヒアスホルム城で着々と地位を上昇させ、改革のためのキャビネット令を発することを中心とする政務を執り行っている間、コペンハー

ゲンではヒアスホルム城における宮廷情報が駆け巡り、ストルーエンセと王妃に対する憤りが日々激しくなっていた。これにはストルーエンセ自身が、廃止した検閲廃止が大きく関係していた。彼と王妃のスカンダルに関する多くの出版物が発行されて、民衆の間に広まってしまったのである。民衆は国王が完全無比な状態で政務を執っていないことは理解していたが、それ以上の現実については知らなかった。巷ではストルーエンセが国王を殺して自分が国王になる計画だというまことしやかな情報が流れていた⁴⁸。

3-2 ストルーエンセの改革⁴⁹

上述のようにストルーエンセは政治的に絶対的な権力を掌握したが、それを以て彼は一体何をしようとしたのであろうか。それは「改革」である。しかも「啓蒙主義的」改革である。ヨーロッパの中心部から見ると周辺に位置し後進的なデンマークを改革しようとしたのである。ストルーエンセは権力を握る中で、数多くの行政命令、すなわちキャビネット令を発して行政面での改革、さらに社会的面での改革を重点的に実施している。その数はキャビネット令だけで1800件程あり、勅令等も合わせるとさらに数は増す。

本節では、これまでの関連文献を整理して、できる限り多くの改革内容を以下に記したい⁵⁰。まず改革を行政面と社会面とに分類して、可能な限りの具体例を示し、その後各代表的改革例を数例取り上げて内容等を詳しく考察したい。最後に、ストルーエンセによる改革に対する影響等を考察する。

3-2-1 行政改革

ストルーエンセの行革の目標は効率化と秩序化であり、以下のように整理される。

- 1) 財政（機構）改革
- 2) 枢密院の廃止
- 3) 外交部門改革⁵¹
- 4) 王国近衛兵（隊）Den Kongelige Livgarde の廃止⁵²
- 5) 陸軍改革（再編成と削減）
- 6) コペンハーゲン市の改革
- 7) 大学改革⁵³
- 8) 国立の医療施設に対する改革⁵⁴
- 9) 恣意的に貴族を官吏に登用する慣例の廃止
- 10) 中央官僚の俸給及び年金の引き下げ

考察の具体例としては財政改革とコペンハーゲン市の改革を取り上げる。

財政（機構）改革

これまでの3部門に分離していたデンマーク財政機構、すなわち大蔵省 Rentekammer、関税局 Toldkammer、商業省 Kommercekollegiet が一元化され、財務省 Finanskollegiet のもとに統合された。その元に歳入会計 finanskasse が設けられた。これによって、従来個別であつ

た国内税収入、エアスン海峡通行税⁵⁵、さらにノルウェーからの収入も国家の歳入として統合されたのである。この財政面での改革は現実には最も遅れていたことの一つであり、ストルーエンセの兄カール・ストルーエンセ Carl August Struensee (1735-1804)によって推進された。彼自身はプロシアの官吏を務めて、実務経験も有した。ドイツ人官吏ゲーラーGähler と共に改革を推進し、宮廷からそして政局からも距離を置いて、財政改革に尽力したのであった⁵⁶。なお、ストルーエンセは全ての行政機構・国家財政において儉約を求めた。

コペンハーゲン市の改革

行政機構の改革は中央官庁だけでなく首都コペンハーゲン市にもおよんでいる。改革前の状況であるが、フレデリック 3 世統治下に同市に対して特別に付与された権利も削減されてきた上に、市の統治が効率的だとは言えない状況が続いていた。当時市当局の構成は次の通りであった。国王が任命する、市長 1 名、副市長 3 名、正副の市会議員 raadmand が 16 名で、さらに市当局自身が任命する「32 人衆 mændene」が存在した。問題はそれらの中に人口でも一定数を占める手工業者が含まれていないことであった⁵⁷。これは民主的なこととはいえ、市当局自体が何も行動を起こさず放置したため、ストルーエンセが先に改革へ動くことになったのである。彼はまずユトランド地方のトゥナ Tønde の前地区行政官 amtmand であったホルステイン U.A.Holstein 伯爵を新市長 overpræsident に迎えた。そしてその彼は国王署名無しの行政命令で、「32 人衆」をも解散してしまった。市長は効率を重視する行政官で、人材にも要職には有能な者を登用し、例えば逸材のボーネマン Bornemann を市警察本部長に据えている。

そして司法組織として「王宮・コペンハーゲン市裁判所」Hof og Stadretten が新たに設置されている(1771 年 6 月 15 日勅令)。この法廷の設置はストルーエンセによったとはいえ、絶対王制の重要な改革の一つであった。なぜならこれまでは宮廷向け、コペンハーゲン市民向け等個別に多数存在した裁判所が 1 ヶ所に統合されたからである。また裁判の執行においても、調査部門と審理部門に分けて設置したことは画期的であった。

3-2-2 社会改革

社会改革は行政改革と比すると一般人との関わりや影響が多い改革であり、ストルーエンセがアルトナ時代に経験・実行したことが生かされている。内容的には多岐にわたるが主なものは以下の通りである。

- 1) 検閲の廃止 (出版の自由)
- 2) 貴族特権の廃止
- 3) 宮廷における貴族中心主義の廃止
- 4) 宮廷における儀礼的な礼儀作法や規則の廃止⁵⁸
- 5) 非嫡出子と嫡出子の権利同等化
- 6) 未婚者間における性交の無犯罪化
- 7) 望まれない子どもを、匿名で預ける場の設置⁵⁹
- 8) 乳児院の設置⁶⁰

- 9)拷問の廃止（特に聴取中の拷問）⁶¹
- 10)窃盗の罪に対する死刑廃止⁶²
- 11)当局による家宅捜索権の廃止
- 12)穀物価格を調整するために国営の穀物倉庫の設置⁶³
- 13)小作農民に対する農地の割当⁶⁴
- 14)祝日の廃止（1770年10月26日勅令）
- 15)宝くじの導入⁶⁵
- 16)王室所有公園・庭園の一般開放
- 17)日曜日における市門の開放⁶⁶

検閲の廃止（出版の自由法制定）

1750年に当時の国王フレデリック5世は絶対王として振る舞うために、検閲制を導入した。全ての出版物は出版前に検閲を受けてコントロールされることになったのである。現実的にはそれに違反した場合は罰金刑、禁固刑、さらには死刑も想定されていた。しかし、1755年に国家の基幹産業である農業の振興のために『デンマーク＝ノルウェー経済雑誌』が発刊され、各方面から意見を募るため、この雑誌に限って検閲は廃止された。そして、ストルーエンセが権力を握り、国民からの支持を得ようとするために検閲を廃止して出版の自由を認めたのである（1770年9月4日付けキャビネット令、1770年9月14日勅令）。

世界的に見ると、スウェーデンが1766年に世界で最も早くの出版の自由を憲法の規定に盛り込んでいる。事前検閲なしに出版が自由に行われることが認められたのだが、宗教に関することは例外とされた。その意味で例外のないデンマークの出版自由法の方が内容的には自由度において当時、世界で最も進んでいたといえる⁶⁷。

デンマークではこの検閲廃止により、出版活動が盛んとなり、農地に緊縛され、地主から搾取されている農民の状況を改善しよう、という論調も現れてきた。しかし、予想以上に出版活動が盛んになりすぎ、ストルーエンセの政策や、彼と王妃との関係を記して中傷・攻撃する小冊子も多数出現したため、約半年後に出版の自由を一部制限することになった。結果的に（事前）検閲が再度導入されという訳ではなく、出版可能な内容が示されることになったが、一度始まった反ストルーエンセの論調は止むことなく続いた。

ストルーエンセ時代の政策を全面的に否定した次のグルベア政権下では、出版の自由を制限しようという動きはあったが、結果的には出版の自由が保障され、保守反動化する政府や賦役を強化する地主層が公然と批判され、後の土地緊縛制廃止に好意的な世論形成に大きな役割を果たすことになる。

祝日の廃止

ストルーエンセの改革は社会生活に影響を与える宗教面にも及んでいる。1536年の宗教改革以降、全部で22日もあった日曜日以外の祝祭日が、ストルーエンセ時代に出された1770年10月26日勅令で、他のプロテスタント国家の例を参考に大幅に整理されて半分の11日とさ

れたのである。廃止された 11 日分、例えば顕現日 (Helligtre-kongersdag、1 月 6 日)、聖ハンスの日 (Sankt Hans dag)、諸聖人の日 (Allehelgensdag、11 月 1 日⁶⁸)、聖マーティンの日 (Mortensdag、11 月 11 日) は、普通の労働日となり、教会に行く必要がなくなった。この大幅な見直しの際に生き残ったのが 1686 年に制定された「大祈祷日 Store Bededag⁶⁹」であった。ストルーエンセがこの勅令を機会に「大祈祷日」を導入したとする言説があるが、彼は整理する際に残しただけである。また最近この「大祈祷日」に関してデンマークでは大きな議論が起こっている⁷⁰。

3-2-3 ストルーエンセ改革の影響・評価

ストルーエンセは権力を握っていた僅か 16 ヶ月の間に数多くの法令 (その大半がキャビネット令) を出している。一説には 2000 以上あり⁷¹、一日平均 4~5 の法令が公布されている。それだけの量を短期間に発したのである。だが内容を精査すると、系統的に命令が出されたとは考えにくい⁷²。

ストルーエンセはこれらの政策を実行することが難しいとは思わなかった。ただ、これらの政策を出すスピードは矢継ぎ早で、変化の方が追いつかなかつたのである。結果的に理想的な社会をつくるというより、ストルーエンセの改革は人々に戸惑いと不安をもたらしていた。なお、ストルーエンセは文化面ではあまり目だった改革は行っていない。王立劇場を王室会計の下に置いたくらいである。その背景にあるのは、常に物事を現実的な有用性と経費の大きさから判断する傾向があり、文化にはそれが当てはまらないからであろう。

ストルーエンセは当時知られていたプロシアのフリードリヒ大王を模した啓蒙主義的改革を断行していった。この改革自体はそれこそ素晴らしい内容を含むものであったが、当時のデンマークの状況が無視した余りにも性急な改革であったため、支持を期待していた国民がついていけなかった。さらにストルーエンセは外国人 (ドイツ人) であり、デンマーク語を使用しようともせずに宮廷・軍隊での公用語としてドイツ語の使用を強要するなど、デンマークの伝統を悉く無視した上に王妃との不倫関係も世間に知れるところとなり、国民の間には彼に対する憎悪の感情が深まる一方であった⁷³。また、改革も人々のためというより、自分が信じている原理 princip を実践する (したい) ためであった。ゆえに改革が妥当で可能かどうかというより、改革を行ないたいという彼の意思が優先されたのである。

また注目すべきは、これまでとは異なり、政府 (国王) に対する示威行動が発生したことである。1771 年 6 月には海軍の改革によって、日・祝日にも勤務することになったホルメン造船所に勤める船大工達が反抗を示したが、取り押さえられてしまった。その 3 ヶ月後今度はノルウェー人を中心とする約 200 名の水兵が、未払い賃金の支払いを求めて国王達が滞在するヒアスホルム城を目指してデモ行進を始めたのであった。途中でシェラン地方の連隊将校が登場し、彼等の要求を必ず国王に伝えるということでデモ隊がようやく引き返したのであった⁷⁴。水兵達の行動はストルーエンセの政策に反対するというより、国父である国王に助けを求めたのではあるが、絶対王制下珍しい示威行動であった。同様な出来事がもう 1 件発生している。それは近衛兵 (隊) 改革に端を発している。経費削減の為とはいえ、ストルーエンセは王国近

衛兵（隊）Den Kongelige Livgarde を廃止しようとしたのである。これはさすがに士官達の反感を招き、見直すという結果になった。

上に見た示威行動はストルーエンセにとって想定外の出来事であり、ショックも受けている。その一方で自分の身を守ることに對しては細心の注意を払うのではなく無頓着でもあった。例えば王妃との関係もそうであるが、頻繁に居城のクリスチャンスボー城を出て、コペンハーゲン北部のヒアスホルム城や、フレデリクスベア城に、国王一家と宮廷が移動したことがあげられる。そこには反対派がおらず、ストルーエンセは国王を人質に取った形で自分の好きなような統治が行なえたのだが、他方では首都に残った反対派が留守中に集まって一計を案じることが可能な隙を与える結果となった。それが次に述べるクーデターである。

3-3 クーデター発生

国王一家と宮廷の一部は 1771 年夏をヒアスホルム城で過ごしたが、前年のように直ぐにはコペンハーゲンに戻って来なかった。まず 11 月にコペンハーゲン近郊のフレデリクスベア城に滞在し、ようやく年が変わる直前に首都のクリスチャンスボー城に帰ってきた。その留守の間にクリスチャンスボー城では皇太后ユリアナ・マリエと息子の家庭教師であった神学者グルベア Ove Hoegh-Guldberg (1731-1808) がストルーエンセを失脚させる計略を練っていたのである⁷⁵。

そして、1772 年 1 月 16 日、新年度最初の仮面舞踏会がクリスチャンスボー城で開催され、最後のダンスは王太弟フレデリックと王妃カロリーネ・マチルデが踊った。その夜には城の周囲に兵が配置されるなか、ユリアナ・マリエや王太弟フレデリックが国王の寝室に乗り込み、ストルーエンセの逮捕状と王妃の退去状に強制的に署名させたのであった。その時点では、ストルーエンセとブランドは既に逮捕されてカステレット要塞へ移送・収監されていた。そして翌朝には王妃カロリーネ・マチルデがクロンボー城に移送された。加えて国王は新たな逮捕状に署名させられ、宮廷も約半数が保護下に置かれた⁷⁶。さらに国王は皇太后と王太弟フレデリック宛てにストルーエンセの件で助けを求める書類にも署名させられた。そしてその日付はストルーエンセらの逮捕前のものになっていた。全ては計算尽くだったのである。なお、デンマークの歴史において、このような宮廷クーデターの発生は極めて稀である。

3-4 収監と処刑

収監されてから、特別な審問委員会 Inkvisitionskommision が設置され、ストルーエンセの統治、王妃の行状について調査が行われた。一般に流布していた「ストルーエンセが国王を殺そうとしている、あるいはストルーエンセが国王を退位させる⁷⁷」という類いの噂に関しては証拠が見つからなかった。ストルーエンセは早い時点で王妃との関係を認め、これは王妃を庇うためでもあったと言われている。なお、王妃側もストルーエンセとの関係を認め、そのことを記した文書に署名している⁷⁸。ストルーエンセ自身は申立書を提出し、委員会での質問にも答えている。一方ブランドは特に申し立てを行っていないが、国王に減刑の嘆願書を送付している。

1772年4月25日に、デンマーク法第6章第4節第1項の大逆罪及び国王法第2条(国王の神聖な身分)・第26条(大逆罪)により、ストルーエンセと友人のブランド両名に死刑判決が出た⁷⁹。そして国王裁可を得た後⁸⁰、早くも3日後の4月28日にストルーエンセとブランドは市内東部共有地 Østre Fælled において刑を執行された。まずブランドが断頭台に上げられ、鎖を解かれた。判決文が読み上げられ、ブランドが有する貴族紋章が死刑執行人によって、粉々にされた。そしてまず右手、そして頭部が切断され、服を剥がされた後手足が切り離された⁸¹。この後ストルーエンセが断頭台に上げられ、同様に残酷な方法で四肢と頭そして性器が切断された。頭部については一気に切断できず3回に分けて切断された。刑の執行後、二人の頭部は市内の西部共有地 Vestre Fælled で晒された。当日は約2000人⁸²が集まり刑の執行を目の当たりにした。このような残酷な処刑が判決後、速やかに断行された背景には、新しい権力者となったユリアナ・マリエやグルベアが、自らの基盤が法的正当性を欠いて安泰でないことを意識し、できる限り早く旧時代に終止符を打ちたいという意図があった⁸³。

一方王妃カロリーネ・マチルデは、1月17日のクーデター発生の後クロンボー城に幽閉された。ストルーエンセ同様罰を受けるべきだという世論はあったが、英国王からの動きもあり、クリスチャン7世との婚姻は解消されたうえで、子ども達とも引き離され国外追放の身となった。行き先は英国本土ではなく当時、ドイツ北部にあった英国王室領地のツェレ Celle に移送された。体面上英国王であった兄のジョージ3世は彼女を英国内に帰国させることが出来無かったのである。失意の前王妃を支えるため、以前懇意にしていた女官長のフォン・プレッセン伯爵夫人が志願してカロリーネ・マチルデに仕えた。穏やかな生活が続く中、カロリーネ・マチルデは1775年5月に、当時現地で流行した熱病(猩紅熱)に感染し急死した。享年23歳という若さであった。前王妃逝去の一報を聞いてユリアナ・マリエは胸をなで下ろしたという⁸⁴。この王室を巻き込んだ悲劇は発生直後から国内外の関心を呼び、文学作品⁸⁵や演劇⁸⁶、映画⁸⁷の題材にも取り上げられてきている。

4. おわりに

以上、クリスチャン7世統治初期について、社会政策を中心に実施された政策をみてきた。特に1770-72年の約2年間はドイツ人医師ストルーエンセが国王の侍医という立場を利用して、精神的な病を患った国王に代わって絶対的な権力を掌握して改革を行なった時代であった。彼はデンマークを病人にみたてて、改革という治療を行おうとしたのである。特に行政機構と社会を変革することを目指し、矢継ぎ早に1800を越えるキャビネット令を乱発というくらいのスピードで発出した。効果や影響を検証する暇もなかった。その一方で王妃との密会も続いていた。ストルーエンセはまさにエネルギー的な人物であった。

ストルーエンセの改革は同時代のヨーロッパにおける啓蒙改革(プロシアのフレデリック2世、ハプスブルク家のマリア・テレジア及びヨーゼフ2世、ロシアのエカテリーナ達の改革)と比較するとその内容は革新的でも、時代の先を読んだものでもなく、ごく普通のものであった。ただ、当時のデンマーク人にとっては革新的な大改革であったことは確かだ

佐保吉一

ある。外国人だからこそ、デンマークの前近代的な部分が見えたのかもしれない。方法や形式を除外すると、デンマーク人自身が行えなかった近代化を、ストルーエンセが荒治療で推進したともいえる。

またストルーエンセの改革はストルーエンセへの憎悪のあまり、実施された改革まで全て憎しみの対象になっており、次のグルベアを中心とする保守反動政権により、その殆どが否定された。しかし、出版自由法のように評価される部分もあり、継続された改革があったことも確かである。

これまでデンマーク史では外国人（ドイツ人）であるストルーエンセを悪者扱いすることが通常であった。しかし最近では、例えば若くて何も知らない外国から来た王妃がストルーエンセに騙されたという構図ではなく、カロリーネ・マチルデ自身の、王妃としての責任を問う声も出てきている⁸⁸。

最後にこのようなストルーエンセ時代が現出した背景を考えたい。当時デンマークが絶対王制下にあったこと、そして図らずもその絶対王が政務不能であったこと、さらに絶対王が政務不能に陥った場合の想定が絶対王制を規定している「国王法(1665)」や「デンマーク法(1683)」にないことが偶然にも重なった。そして、国王の生活の場である宮廷で力を獲得した人物が、国王の信託を受けて、あるいは国王の信頼を利用したのである。信託を受けた人物はクリスチャン7世治世初期ではストルーエンセであり、父王のフレデリック5世治世下ではモルトケであった。どちらもドイツ系であったのが特徴的である。

また統治形態で見ると、ストルーエンセの統治は枢密院も存在しないなか、ブレーキをかけるシステムや人物が皆無な状況下、デンマークの絶対王たちがそれこそ理想として目指した統治形態を現出した。それが「キャビネット主導型絶対王制」である。これは前王時代にクライマックスを迎えた「官僚主導型絶対王制」から官僚の力を削いだものであった。換言すると国王が官僚から権力を取り戻したのであったが、クリスチャン7世の場合は政務不能の国王に代わってストルーエンセがキャビネットという場で権力を行使したのであった。次のグルベア政権でもその形態が継続されていく。

次稿ではそのグルベア政権下およびその後に登場する改革志向の新政権における社会政策についてみていきたい。

註

¹ 精神分裂症 skizofreni と言われている。Cf. Friis, Aage: "En Lægeberetning om Christian VII's Helbredstilstand" i Historiske Tidsskrift, 8.rk.I, 1907, ss-80-83. Langen, Ulrik: Struensee -100 danmarkshistorier-, K.2018, s.100.

² 前期については、絶対王制の確立プロセスという視点で研究を重ねてきている。以下の拙稿を参考。「デンマーク絶対王政の成立」『関学西洋史論集』第18号、1990年、27-39頁。「デンマーク絶対王制の確立過程 -フレデリック三世の治世(1660-70)を中心に-」『北海道東海大学紀要(人文社会科学系)』第9号、1996年、81-103頁。「デンマーク初期絶対王制における身分政策-1661-1671年の対貴族政策を中心に-」『北海道東海大学紀要(人文社会科学系)』第11号、1998年、39-54頁。「スコーネ戦争(1675-79年)後のデンマークにおけるクリスチャン五世の絶対主義政策」『北海道東海大学紀要(人文社会科学系)』第12号、

1999年、109-124頁。「デンマーク法(1683年)にみられるデンマークの絶対主義 一国王法(1665年)との比較において」『関学西洋史論集』第28号、2005年、35-46頁。

³ 中期に関しては以下の拙稿を参照。「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究(1)ーフレデリック4世治世(1699-1730年)を中心にー(上)」『東海大学文化社会学部紀要』第5号、2021年。「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究(2)ーフレデリック4世治世(1699-1730年)を中心にー(下)」『東海大学文化社会学部紀要』第9号、2023年。「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究(3)ークリスチャン6世治世(1730-1746年)を中心にー」『東海大学文化社会学部紀要』第10号、2023年。「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究(4)ーフレデリック5世治世(1746-1766年)を中心にー」『東海大学文化社会学部紀要』第11号、2024年。

⁴ 一部の規定は現行法でも効力を有している部分があり、1990年時点で効力を有しているのは、デンマーク法中の3-19-2、6-17-5、5-5-1、5-14-4、6-10-2などの条項である。

⁵ フレデリック7世(在位:1848-1863)は絶対王としては在位が僅か数ヶ月であるため、本稿では絶対王制後期の国王には含めていない。

⁶ 土地緊縛制廃止については次の拙稿が詳しい。「デンマークにおける土地緊縛制廃止(1788年)について」、飯田収治編著『西洋世界の歴史像を求めて』、関西学院大学出版会、2006年、181-203頁。

⁷ デンマークの奴隷貿易廃止に関しては次の拙稿を参照。「デンマーク奴隷貿易廃止」『IDUN(大阪外国語大学デンマーク語・スウェーデン語科研究室)』(10)1992年、195-212頁。

⁸ 地方身分制議会の設置・開催については次の拙稿を参照。「19世紀デンマークにおける地方身分制議会設置令について」『北海道東海大学紀要(人文社会科学系)』7号、1994年、55-68頁。「デンマーク第1回ロスキレ地方議会(1835-36年)について」『北海道東海大学紀要(人文社会科学系)』第8号、1995年、15-30頁。

⁹ 例えば、著述家のダンペJ.J.Dampe(1790-1867)は反絶対王制的な言動で逮捕され、死刑判決を受けた後、終身刑に減刑され、1848年の絶対王制終焉後に自由の身となっている。

¹⁰ Busck, Jens: Christian 7 - Kongen der mistede sin forstand, K.2019, s.6. Cf. Langen, Ulrik: Struensee - 100 danmarkshistorier, Århus, 2018, s.22.

¹¹ Élie Salomon François Reverdil(1732-1808)は農業改革にも関心があり、「農業委員会(1766年)」のメンバーでもあった。政争に巻き込まれて一端デンマークを離れるが、1771年には国王クリスチャン7世の面倒を見るために宮廷に呼び返された。後述のストルーエンセの失脚とともにスイスに戻った。後に回顧録を出版しそれが重要な史料となっている。Cf. Struensee og Det Danske Hof, 1760-1772, K.1859/2013.

¹² Busck, op.cit., s.10.

¹³ Carolineの発音は英語とデンマーク語で異なるが、本稿ではデンマーク語での読み方「カロリーネ」に統一しておく。

¹⁴ なおこの後も含めて、1784年に王太子フレデリック(後のフレデリック6世)が、精神に問題のある父王に代わって、実質的な権限を獲得するまで、約18年間、国王を巡る権力闘争が見られることになる。

¹⁵ 背景には皇太后のソフィエ・マグダレーネの存在があった。息子がモルトケに支配されていたのを好ましく思っていなかったのであろう。なお、クリスチャン7世とソフィエ・マグダレーネの関係が悪化した際にはモルトケが再度呼ばれている。Cf. Busck, op.cit., s. 12.

¹⁶ 1767年春、ヴォルテールのZaireが上演された際にはスルタン役で出演した。

¹⁷ Busck, op.cit., s.11.

¹⁸ 長靴のカトリーネ(Støvlet- Katrine)とも呼ばれた。彼女はドイツ貴族の非嫡出子であった。

¹⁹ Busck, op.cit., s.11.

²⁰ その中心人物は外相ペアンストーフであった。当時宮廷内ではペアンストーフのいる国王派とルイセ・フォン・ブレッセンが中心の王妃派の反目があった。

²¹ 職務としては孤児・貧民の子ども・受刑者の健康管理に関わっていた。この時の経験が後のデンマークにおける改革にも影響を与えている。

²² 幼友達であり、後にデンマーク国王のキャビネットで雇用している。

²³ ランツァウ自身もこの件を成功させて、デンマークの国政・宮廷に復権したいと思っていたことも背景にあった。

²⁴ Langen, op.cit., s.27.

²⁵ デンマーク絶対王制下の位階制の中で第3等級3. rangklasseに属するタイトルである。主に市民身分の官吏に授与された。

²⁶ Busck, op.cit., s.26.

²⁷ デンマーク絶対王制下の位階制の中で第2等級2. rangklasseに属するタイトルである。Etatsrådよりも上位の位階で、重要事項における国王の顧問に授与された。

- ²⁸ Cf. Bech, Sven Cedergreen: *Oplysning og tolerance 1721-1784, Politikens Danmarkshistorie, Bd.9, K. 1985, s.432. Amdisen, Asser: Til nytte og fornøjelse : Johann Friedrich Struensee (1737-1772), K.2003, s.66.*
- ²⁹ フレデリック 4 世時代 (1699-1730) に一時類似の形式が登場したことはあった。
- ³⁰ Skrubbeltrang, Fridlev: *Det danske Landbosamfund 1500-1800, K.1978, s.304.*
- ³¹ Ibid.
- ³² Ibid., s.305.
- ³³ その兵役従事者は自由を獲得し、自身が望む場所で新しい小作関係を結べる。
- ³⁴ Skrubbeltrang, op.cit., s.273.
- ³⁵ Cf. Fredericia, J. A.: *Aktstykker til Oplysning om Stavnsbaandets Historie, K.1888, s.197.*
- ³⁶ Skrubbeltrang., op.cit., s.305.
- ³⁷ Fredericia, op.cit., s.183.
- ³⁸ ここで国王はカトリーネ *Katrine* にも再会できた。
- ³⁹ この時のことが禍いして、後に大逆罪で死刑に処されることになった。
- ⁴⁰ ストルーエンセ自身、アルトナ時代に執筆活動を行ない、雑誌も発行していたが、その際検閲・出版の自由を巡って当局とやり合った経験がある。Cf. Holm, Edvard: *Danmark-Norges Historie fra den Store Nordiske Krigs Slutning til Rigernes Adskillelse 1720-1814, Bind IV, K.1902, ss.272-73.*
- ⁴¹ ベアnstーフには2ヶ月前に行われたアルジェ *Algier* との戦争に敗れた責任も問われていた。国王からは枢密院メンバーとしては残るように慰留されたが、断って所有地所に戻り、1772年に死去した。
- ⁴² この件が後にストルーエンセが失脚するクーデターの遠因にもなっている。
- ⁴³ なお解散の理由は多くの者で国家のことを扱うことは難しいからということであった。Busck, op.cit., s.33.
- ⁴⁴ シューマツハは1771年3月に解任される。
- ⁴⁵ 国王の精神状況が悪化した際には、彼らが国王と共に王宮の家具をバルコニーから投げる姿も度々目撃されている。Cf. Busck, op.cit., s.33 og 35.
- ⁴⁶ 小さなストルーエンセ *lille Struensee* と呼ばれた。
- ⁴⁷ この頃になるとストルーエンセは殆ど国王の病気には関わらず、治療等は宮廷医 C.J. Berger に任せている。
- ⁴⁸ Olden-Jørgensen, Sebastian: "Struensee-Affæren 1770-72" i Thomas Lyngby (mfl. red.) "Magt og Prag", K. 2010, s.202 og 206.
- ⁴⁹ 彼の改革についてはその大半が次のキャビネット令集に収められている。Hansen, Holger (udg.): *Kabinetstyrelsen i Danmark 1768-1772. Aktstykker og Oplysninger, I-III, K.1916-23.* この資料集には2200のキャビネット令が収められているが、ストルーエンセが実権を握っている時代のものは約1800ある。
- ⁵⁰ ストルーエンセの改革はその大半がキャビネット令に端を発しているが、その数が膨大(1800件以上)であるため、全てを概観した研究は現在のところ見られない。
- ⁵¹ ドイツ官房が外交も扱っていたが、それを分離して専門担当部署を立ち上げた。そしてドイツ官房は公爵領のみを担当することにした。
- ⁵² 経費ばかりがかかるため、近衛兵は既存の連隊に編入されることになった。しかし、この改革は近衛兵達の誇りを汚すものとなり不興を買い、示威行動も起こっている。
- ⁵³ 1536年の宗教改革を経て1537年に再興されたコペンハーゲン大学を抜本的に改革することを目指した。また同君連合国ノルウェーに独自の大学を創設する計画もあった。
- ⁵⁴ これまであった王立孤児院 *Vejsenhus* や王立養護学校 *Det Kongelige Opfostringshus* が統合されて総合保護施設 *Den almindelig plejeanstalt* となった。乞食については今後警察が総合保護施設に連れて行くことになった。なお、王立孤児院は、それ以後は市民子弟の実科学校 *realskole* となった。
- ⁵⁵ 1429年に導入された税で、私的な王室歳入とされ総歳入の約3分の1を占める規模であった。税の内容上これまで手を付けることは困難であった。
- ⁵⁶ カール・ストルーエンセの改革については次の研究がある。Johansen, Hans Chr.: *Carl August Struensee: Reformer or traditionalist?,"Scandinavian Economic History Review", 17:2, 2011.*
- ⁵⁷ その理由は手工業組合が物の値段を決定出来ること、さらには汚職を防ぐためであった。
- ⁵⁸ ストルーエンセは自身が中産階級の出身であり、啓蒙主義の影響も受けているため宮廷内の儀式・儀礼・規則の意味や機能を理解できず、全てが非効率的かつ非合理的で浪費に繋がると考えていた。Bregnsbo, Michael: *Caroline Mathilde. Magt og skæbne, K.2007, s.122.*
- ⁵⁹ 頻繁に起こる子殺しを阻止するためである。開設後4日間で24人の子どもが寄せられた。Bech,

op.cit.,s.454.

⁶⁰ これまで多くの乳飲み子が遺棄されていたため、彼らの世話をする施設が必要とされていた。

⁶¹ 警察や当局も配慮を持った扱いをすることが求められた。

⁶² 現実的にはそのことがすでに実行されていたが、ストルーエンセはそのデンマークの現実を理解しておらず、法律に窃盗が死刑であると明記されているため、そこに固執して変更(改革)しようとした。Cf. **Bech, Sven Cedergreen: Storhandelens by, Københavns Historie Bd. 3 (1728-1830), K.1981, s.198.**

⁶³ 1770年及び1771年は凶作で穀物不足となった上に価格も高騰したための措置である。

⁶⁴ ストルーエンセは農業改革に関して積極的な興味は示さなかったが、親農民というよりも反地主の立場を取っていた。それを象徴するように1771年には2年前の賦役勅令を補足し、賦役の範囲を決定する新勅令を出している。

⁶⁵ 当時のヨーロッパでは国の新しい歳入源として富くじが導入されていた。コペンハーゲンでは1771年1月にストルーエンセの許可を得て始まった。

⁶⁶ 日曜日は教会に行くことが優先されたため市門は閉じられていた。改革によって日中は市門通行税が無料となった。

⁶⁷ このデンマーク国王の革新的な決定に関する知らせは、すぐにヨーロッパ中に広がり、ヴォルテールの元にも届いた。彼はすぐにその喜びを詩に表現してデンマーク国王の功績を称えている。**Langen, op.cit., s.37.**

⁶⁸ 同じプロテスタント国であるスウェーデンでは、この日が現在も移動祭日として生き残っている。

⁶⁹ キリスト教の祭日「イースター(復活祭)」後の第4金曜日に当たる日に祝われる。

⁷⁰ この発端は2022年2月に始まったウクライナとロシアの戦争に関連して、デンマーク政府はNATOのメンバーとして、その防衛費を増額する必要が生じた。その際政府が採った政策は全く独自なものであった。祭日を休日とせず通常の日として、通常の生産活動を行うことによって生まれる富の合計(政府試算で約30億クローネ)をその軍事増額費とするとしたのである。(労働組合等からの反対はみられたものの2023年2月28日の国会で賛成95, 反対68で可決された)。この休日ではなくなったのが大祈禱日だったのである。それでマスコミ上ではこの日を休日に設定したストルーエンセのことが注目を浴びた。未だに議論を呼び、今年初めてその日を迎えたが、企業によっても例年通り休業にしたりするところもあり、現在デンマーク社会では少し混乱もみられる。

⁷¹ キャビネット令だけでも約1800あり、これに勅令等が加わる。

⁷² ある意味思いつきで、そして改革の進展具合を見て命令を発していた。Cf. **Bech, Oplysning og tolerance 1721-1784, Politikens Danmarkshistorie, s.441.**

⁷³ 検閲の廃止で出版活動が盛んになりすぎ、ストルーエンセの政策や王妃との関係を記して攻撃する小冊子が数多く出現したためである。なお、ストルーエンセ時代(1770-72)に出回っていた小冊子を収集した人物がいる。ルクスドーフ **B.W. Luxdorff(1716-88)**で、日記を残していることでも知られている。彼の集めた小冊子が王立図書館に保存されており、現在デジタル化されたものを見ることが出来る。Cf. **Samling af skrifter fra Trykkefrihedstiden 1770-1773. <https://tekster.kb.dk/pages/tfs-bibliografi>**

⁷⁴ Cf. **Amdisen.,op.cit., ss.359-361.**

⁷⁵ 一説にはカロリーネ・マチルデがストルーエンセとの第二子を懐妊したという情報が流布し、それに皇太后ユリアナ・マリエが反応し、クーデター計画が一気に現実化したと言われる。

⁷⁶ このクーデターのことを最高裁判事でデンマーク官房の高級官吏でもあったルクスドーフは1772年1月17日の日記冒頭に「大きな革命 **Stor Revolution**」だと記し、最後には「人々は歓喜に沸いた **Almuem var som rasende af Glæde**」と記している。**Nystrøm, Eiler (udg.): Luxdorffs Dagbøger I (1745-73), K.1915-30, ss.446-47.** なお、このストルーエンセが逮捕された1月17日には、国王と王太子が馬車に乗って市内を巡り、市民から大歓声を受けている。

⁷⁷ **Olden-Jørgensen,op.cit., s.202 og 206.**

⁷⁸ 王立図書館に所蔵されている。Cf. **<https://pin.it/1nrg8N37i>**

⁷⁹ ブラントは友人からストルーエンセとの関係を絶つように助言されていたが、結局はそれを続けた。ストルーエンセ同様デンマーク法の大逆罪が適用されて死刑の判決を受けた。その背景には先述のように国王との悪化した関係、国王との殴り合いの喧嘩も考慮されていた。

⁸⁰ 国王はこの時点で助命や減刑を実施することが出来たが、あえてそうしなかった。だが3年後、「私は二人とも救いたかった」と述懐している。

Cf. **<https://denstoredanske.lex.dk/J.F.Struensee>** (図の説明文)

⁸¹ 過去の事例(例えば1676年のグリッフェンフェル **Griffenfeld**)では、断頭台で刑の執行直前に恩赦・減刑もあり得たが今回はそうならなかった。

⁸² 一説には1万人とも言われている。Cf. Busck, op.cit., s.39. また現地には治安維持のため歩兵1200名、水兵4400名、騎兵300名が配置されていた。

⁸³ なお、ストルーエンセの兄については、弟が捕らえられたのと同時に逮捕・収監された。審問委員会では、彼が主に財務改革の立案に関わり、国王との関わりが薄いこともあり処罰は免れたが、国外追放になった。その後は再度プロシアの官吏となり最後は同国の商務大臣も務めている。1789年にはデンマーク滞在中の業績が評価されて名誉も回復し、デンマーク政府から貴族に叙されている。

⁸⁴ カロリーネ・マチルデは英国王の兄と図って復権を図ろうとしていた。Cf. Olden-Jørgensen, op.cit., s.204.

⁸⁵ Enevoldsen, Herta J.: *Caroline Mathilde – historisk roman for børn*, K.1977/2013. Enquist, P.O.: *Livlåkarens besök*, Stockholm, 1999. Steensen-Leth, Bodil: *Prinsesse af Blodet – en roman om Caroline Mathilde*, K. 2000.

⁸⁶ 'En Dag på Hirschholm Slot(1926)', 'Paladsrevolutionen(1948)'. 日本では宝塚歌劇団によってストルーエンセを主人公にした歌劇が上演されている(以下、宝塚歌劇公式ホームページからの情報)。題目は『海辺のストルーエンセ』で、2023年2月24日(金)～3月2日(木)に大阪にある梅田芸術劇場シアター・ドラマシティで上演された。<https://kageki.hankyu.co.jp/revue/2023/umibenostruensee/index.html>

⁸⁷ “Die Liebe einer Konigin (ドイツ、1923年) “、“The Dictator”(英国、1935年)、“Herrscher ohne Krone”(西ドイツ、1957年)“Caroline –den sidste rejse-”(デンマーク、“En kongelig affære”(デンマーク、2012年。日本でも『ロイヤルアフエア』というタイトルで2013年に公開されている)。

⁸⁸ Olden-Jørgensen, op.cit., s.213.

クリスチャン7世関連年表*

- 1749年：クリスチャン(7世)誕生する。
- 1765年：クリスチャン(7世)が16歳となり堅信式を迎える。2歳年下のいとこである英国王女カロリーネ・マチルデ Caroline Mathilde と婚約する。
- 1766年：父王フレデリック5世が1月14日に死去し、彼の17歳の息子クリスチャンがクリスチャン7世として即位する。彼の養育には問題があり、次第に精神を病むようになる(最終的には現代でいうところの精神分裂症と診断されている)。イギリス国王ジョージ2世の孫娘でいとこにあたるカロリーネ・マチルデとの婚礼式がクリスチヤンスボー城の教会で挙行された(11/8)。またその1週間前にはクリスチャン7世の妹ソフィエ Sofie Magdalene がスウェーデン王太子グスタヴ(後のグスタヴ3世)の元に嫁いでいる。

王領売却が始まる。ユトランド地方における最初の新聞 *Aalborg Stiftstidende* が発刊される。フランス人将軍サン・ジェルマン C. Saint-Germain がデンマークの軍事職辞す。彼は陸軍の専門職化を要求したが、そのことが当時の政治の要職にあった領主層が自らの利益が犯されることを恐れたため、反対したからであった。

- 1767年：ロシアと暫定的領土交換条約を締結する。その内容はロシアのエカテリーナ2世は未成年の息子ポール Paul の為に以前のゴットロープ家領スレースヴィィに対する全ての権利を放棄すること、及びポールが成年に達した際に Oldenburg-Delmenhorst はゴットロープ家領ホルシュタインと領土交換を行うというものであった。

クリスチャン7世は夏に王妃を伴わずホルシュタインに旅行する。その帰国後、悪名高い売春婦のカトリーネ Støvlet-Katrine と関係を持ち始める。

ニーブーア Carsten Niebuhr がアラビア学術探検隊の唯一の生存者としてコペンハーゲンに戻ってくる (11/20)。彼は多くの自然科学に関する事物・資料と共に帰国した。

農業の改革を行うために農業委員会 *landvæsenskommission* が設置される。

- 1768年：クリスチャン7世の売春宿の遊び友達であるカトリーネがコペンハーゲンからホルシュタインの Wandsbek に追放される (1/6)。後のフレデリック6世となるフレデリック王太子が誕生する (1/28)。

北ドイツのアルトナ在住のドイツ人医師 J.F. ストルーエンセがクリスチャン7世の欧州旅行における随伴医師に抜擢される (4/5)。

農業改革を通じてデンマーク農業を近代化するために総合農業省 *General Landvæsenkollegiet* が設置される (4/15)。この省は枢密院を通さず、直接国王へ答申できる強い立場にあった (農業委員会が農業省に改組され政府のコントロール下に置かれる)。

クリスチャン7世がイギリス、フランスを訪問する旅行に出発する (5月)。随行した大臣達は国王の行動に不安を覚えていたが、公なスキャンダルは特に発生しなかった。

彫刻家トーヴァルセン Bertel Thorvaldsen が誕生する。

A.G. モルトケが自領地 *Bregentved* の直営地でホルシュタイン式耕作 *Kobbelbrug* を始める。この方式では三圃制に対して休耕地が小規模であり、これにより生産性が向上し、労働負荷も減少する。

- 1769年：クリスチャン7世が外国旅行より帰国する (1/14)。彼は随行医であったドイツ人医師 ストルーエンセ *Johann F. Struensee* を伴い、侍医とする。

王立農業協会 (*Det kongelige danske Landhusholdning Selskabet*) が設立される (1/29)。この背景には農業技術の改良への関心が高まったことが上げられる。賦役に関する勅令及び農民保有地に関する勅令が公布される (5/6)。

デンマーク最初の全国人口調査が実施され、王国内の人口は約 80 (78.5) 万人、ノルウェー=72 万人、スレースヴィ=24 万人、ホルシュタイン (王国部分) =13 万人、アイスランド=46000 人、フェロー諸島=4754 人であった。

ストルーエンセが *Etatsraad* の称号を得る (5/12)。秋に首都で天然痘が流行し、1000 人以上の子どもが死亡する。

デンマークはロシア=プロシア同盟に参加する (12/13)。この同盟はスウェーデンの政体書が王権強化を実施すればデンマークがスウェーデンに宣戦布告することを義務づけていた。さらに、スウェーデン国会で王権が強化されるような場合はスウェーデンとの戦争も辞さないと言われていた。

- 1770年：この年の春頃にはストルーエンセが王妃との関係を持ち始める。王妃はストルーエンセに王太子フレデリックの種痘の予防接種を依頼し、よい結果が生まれた。ストルーエンセは王宮御進講係 *kongelig forelæser* 任命され、*konferensråd* という称号を得る (5/5)。先王の寡婦ソフィエ・マグダレーネ *Sofie Magdalene* が死去する (5/27)。

宮廷がスレースヴィ・ホルシュタインに移動する (8月)。ストルーエンセの関係ではブランド *Enevold Brandt* が国王の友人であるホルク *Conrad Holch* の代わりにフランス劇場及び王宮美術品収集室 *kunstskammeret* のディレクター職に就く。

ストルーエンセは国王に2通のキャビネット命令書に署名させる (9/4)。一つは検閲の廃止であり、

もう一つは国家公務員職の専門職化であった。検閲に関しては9月14日に廃止が法制化(勅令公布)される。

国王が外相ペアンストーフ J.H.E.Bernstorff を更迭する(9/15)(背後にはストルーエンセの影響がある)。さらにストルーエンセは11月に総合農業省 Generallandvæsenskolegiet を廃止して総合農業委員会 Generallandvæsens-kommission を設置する。植物学者で経済学者でもある G.C. Oeder が委員会のリーダーとなる。

枢密院が解散する(12/10)。ストルーエンセが国王をして自身をキャビネット文書秘書官 *maitres des requêtes* に任命させる。これにより国王に渡る全書類に目を通すことが可能となり、全行政の動きを監督できることになった。正式に枢密院が廃止される(12/27)。これにより全ての権力が、ストルーエンセが握るキャビネットに集中することになる。

外交に関して、それまではドイツ官房が取り扱っていたが、外交に関して専門に扱う部署 Department が誕生する。

コペンハーゲン市の司法制度が新しい宮廷・首都法廷 Hof Stadsret に編入される。後にクラックスの地図 Kraks Vejviser となるデンマーク最初の道路地図がホルク Hans Holck によって発行される。この地図はやがて訪問者や8万人いるコペンハーゲン居住者からの需要が大きくなる。ギュッレンダール Søren Gyldendal が古書の教科書を販売し始める。デンマーク劇場の事業が国王によって取って代われ、王立劇場となる。

- 1771年：この年行政組織と社会を変革するために膨大な数のキャビネット令がストルーエンセによって発せられる。ストルーエンセの賦役に関する法律が公布される(2/20)。さらに春頃、ストルーエンセの手により、国王が彼にキャビネット令 Kabinetsorder を公布する権限を与えるようにさせる。このキャビネット令は国王自身が発するものと同等の効力があるため、この時点でストルーエンセが実質上デンマークの元首となったといえる。

宮廷は夏を過ごすためにヒアスホルム Hirschholm へ移動する(6/17)。カロリーネ・マチルデとストルーエンセの娘であるルイセ・アウグスタ Louise Augusta が誕生する(7/7。彼女は小さなストルーエンセと呼ばれる)。この王妃と彼の関係は出版の自由法により当時の流行雑誌等を通じて国民が知るところとなり、ストルーエンセに対する国民の憎悪が深まることになる。ストルーエンセは自身で自らを枢密キャビネット大臣 *geheimkabinetsminister* に任命する(7/14)。王女ルイセ・アウグスタの洗礼式ではストルーエンセとその友人のプラントは伯爵 lensgrev の身分で王室行事に参列した(7/22)。

ホルメンの船大工達は未払賃金の支払いを求めて国王たちが滞在するヒアスホルム城を目指してデモに参加する(9/10)。

ストルーエンセは「出版の自由(法)」に関して、誤用は処罰されることとする(10/7)が、一度自由化したものを規制するのは難しい状況である。宮廷が市内に戻るが、クリスチャンスボー城ではなくフレデリクスベア城 Fredeiksberg に移る(11/30)。

ストルーエンセは16ヶ月の在職中に約600にもものぼる勅令を矢継ぎ早に公布した。彼はフランス啓蒙主義思想家の自由主義に影響を受けていたが、彼はそれを十分に咀嚼せず理解は皮相的であった。例えば国家の産業保護は縮小され、商業の自由化が図られた一方で、拷問による自白強要が禁止されるなど

刑法が一部緩和された。

総合農業委員会が土地緊縛制に関する意見書を国王に提出した。コペンハーゲンの行政が再編成される。市長 **Overpræsident** という称号を有した王室官僚の下に組織化されるようになる。トゥナ **Tønder** の前地区行政官 **Amtmand** であった U. A. ホルステイン **Holstein** がその新ポストに就く。

王立助産院 **Det kongelige Fødeselsstiftelse** に未婚女性が匿名のまま望まない乳児を持ち込むことが出来る仕組みが考案された。

ストルーエンセは賦役に上限を設けた。平均的な小作農にとって、賦役は馬や馬車を使う日は 48 日、それ以外では 96 日が上限となる。

ストルーエンセの友人プラントが宮廷の音楽隊 **kapel** とその他娯楽 **forlystelse** の監督権を得、国王のワードローブマスター「**Grand maitre de Garderobe**」と呼ばれる称号を得る。

王位推定相続人である王太弟フレデリックの養育との関係でグルベア **Ove Høegh-Guldberg** の地位がフレデリックのキャビネット秘書官 **kabinetssekretær** となる。なお、グルベアの神学的著作・歴史著作はストルーエンセが属するような宗教的自由市主義からは距離を置いたものである。

- 1772 年：ストルーエンセ政権に対する憤りが新しい局面を迎えることになる。1 月 16 日にクリスチャンスボー城で開催された仮面舞踏会の夜、皇太后ユリアナ・マリエとグルベアらを中心とする反対派がクーデターが挙行し、ストルーエンセ、プラント、そして王妃カロリーネ・マチルデ及び彼らの関係者が逮捕される。ストルーエンセとプラントは大逆罪で裁判にかけられた後、4 月 28 日、公衆の面前で残酷な方法によって処刑された。なお、王妃の方はクロンボー城に幽閉された後、クリスチャン 7 世との婚姻は解消され、子ども達とも引き離され、最後は英国軍艦により英国領土ハノーバーにあるツェレ **Celle** へ移送された。

ストルーエンセ後の新政権では推定相続人である王太弟フレデリックを長として枢密院が再創設された。政府の実権は王太弟の家庭教師でもあった保守的神学者グルベアが握り、キャビネット令 **kabinetsorder** の助けをかりて、前政権のストルーエンセ色を一掃する保守反動政治が行なわれた。

アジア会社が再編成され、東インド通商が自由化される。さらに、新聞 **Fyens Stiftstidende** がフュン島で発刊される。

- 1773 年：A. P. ベアンストーフ **A.P. Bernstorff** が外相に就任する。ロシア皇太子ポールが成年に達し、1767 年に締結した両国間の領土交換条約が発効する。これにより長年に渡るゴットロープ家との領土問題（スレースヴィ問題）が解決する。

スウェーデンのグスタフ 3 世のノルウェー侵攻を恐れたデンマークはノルウェー国境付近の警備を強化するが、結果的には何事も発生しなかった。

国家が 1736 年創立のクラント銀行 **Kurantbanken** と紙幣発行を引き受ける。**Kongens Nytorv** にある劇場が王立劇場となる。コペンハーゲンに商業師範学校が設立される。

- 1774 年：グルベアが枢密キャビネット秘書官 **geheimkabinetssekretær** に任命される。国家がグリーンランドとの通商を一手に引き受けることになる。この国家によるグリーンランド交易は 1776 年の国王布告によって公式に確立し、1850 年まで続く。
- 1775 年：アメリカ独立戦争が中立国デンマークの海運と通商に新たな黄金時代をもたらす。ギニア貿易

会社が破産に瀕し、国家が再度アフリカの要塞等を引き継ぐ。

前デンマーク王妃カロリーネ・マチルデが流行の熱病のため 23 歳の若さで死去する。

*作成にあたっては主に次のものを参考にした。

Petersen,Kai: Danmarkshistoriens hvornår skete det, K.1985.

Skipper,Jon Bloch(red.): Danmarkshistoriens Årstal, Achehoug og Det Historiske Hus, K.2001.

クリスチャン7世時代 参考文献 (発行地が København の場合は K. と略)

Amdisen, Asser: Til nytte og fornøjelse : Johann Friedrich Struensee (1737-1772), K.2003.

Bang, J.H.: Charlotte Dorothea Biehls historiske Breve, Historisk Tidsskrift 3. Række, IV Bind (1865 - 1866).

Bech, Sven Cedergreen: Struensee og hans tid, K.1972.

Bech, Sven Cedergreen: Storhandelens by, Københavns Historie Bd. 3 (1728-1830), K.1981.

Bech, Sven Cedergreen: Oplysning og tolerance 1721-1784, Politikens Danmarkshistorie, Bd.9, K. 1985.

Bjerg, Hans Chr. : Danmarks stilling i Østersøen 1700-1900, K.1977.

Bjerg, Hans Chr.og Ole L.Frantzen: Danmark i Krig, Politikens Forlag, K.2005.

Bobé, Louis (udg.): Efterladte papirer fra den Reventlowske familiekreds i tidsrummet 1770-1827, I-X, K.1895-1932.

Bobé, Louis: "Støvlet-Katrine. Anna Katrine Bengthagen" i Fra Arkiv og Museum, 2.rk.,I, 1925, ss.273-282,

Bregnsbo, Michael: Caroline Mathilde. Magt og skævnne, K.2007.

Busck, Jens: Christian 7 - Kongen der mistede sin forstand-, K.2019.

Chapman, Hester W.: Caroline Matilda -Queen of Denmark 1751-1775, London, 1971.

Christensen, Svend Aage og Henning Gottlieb (red.): Danmark og Rusland i 500 år, Det sikkerheds- og nedrustningspolitiske udvalg, K.1993.

Christiansen, Jens: Rural Denmark 1750-1980, K. 1983.

Christiansen, Viggo: Christian den VII's Sindssydom, K.1978.

Engelstoft, Poul og Svend Dahl: Christian VII, i Dansk Biografisk Leksikon, IV, K.1933.

Fabricius, K.(red.): Danmarks Konger, K.1944.

Falbe-Hansen,V.: Stavnsbaandsløsningen og landboreformerne, K.1888.

Feldbæk, Ole: Gyldendals Danmarkshistorie, red. Aksel E. Christesen mf., Bind 4, K.1982.

Feldbæk, Ole: Gyldendals og Politikens Danmarkshistorie, red. Olaf Olsen, Bind IX, K.1990.

Feldbæk, Ole m.fl.(red.): Dansk Udenrigspolitik Historie Bind 2, K.2006.

- Fink-Jensen, Morten: "Op til Zions Glædesskare. Soning, omvendelse og henrettelse. Om Struensee og andre dødsdømte i Christian 7.s København", *Historiske Meddelelser om København*, 100-101, (2007-2008), ss.95-122.
- Fredericia, J. A.: *Aktstykker til Oplysning om Stavnsbaandets Historie*, K.1888.
- Friis, Aage (udg.): *Bernstorffske Papirer udvalgte Breve og Optegnelser vedrørende Familien Bernstorff i tiden fra 1732 til 1835*, I-III, K. 1904-13.
- Friis, Aage: "En Lægeberetning om Christian VII's Helbredstilstand" i *Historisk Tidsskrift*, 8.rk.I, 1907, ss.80-83.
- Garde, H.G.: *De danske-norske Sømagts Historie 1700-1814*, K.1852.
- Glebe-Møller, Jens: *Struensees vej til skafottet. Fornuft og åbenbaring i oplysningstiden*, K. 2007.
- Hansen, Holger (udg.): *Kabinetstyrelsen i Danmark 1768-1772. Aktstykker og Oplysninger*, I-III, K.1916-23.
- Hansen, Holger (udg.): *Inkvisitionskommisionen af 20. januar 1772. Udvalg af dens Papirer og Brevsamlinger, til Oplysning om Struensee og hans Medarbejder*, I-V, K.1927-41.
- Hansen, Norman Hall: *Caroline Mathilde. Dronning af Danmark og Norge, 1751-1775*, K.1947.
- Henningsen, Peter: *Stavnsbåndet*, Århus,2020.
- Holm, Edvard: *Danmark-Norges Historie fra den Store Nordiske Krigs Slutning til Rigernes Adskillelse 1720-1814*, Bind IV, K.1902.
- Holmgaard, Jens: *Landboreformerne - drivkræfter og motiver-, Fortid og Nutid*, Bind 27, 1977-78.
- Hvidtfeldt,Johan: *Håndbog over danske lokalhistorikere*, (Den Historisk Fællesforening), K.1952-56.
- Jensen, Hans: *Dansk Jordpolitik I*, K.1936.
- Jespersen, Knud J.V.: *Gyldendals Danmarks historie Bd.3*, (red., Søren Mørch), K.1989.
- Jespersen, Knud J.V. m.fl.(red): *Mennesket og statsmanden, Moltke -Rigets mægtigste mand*, K.2010.
- Johansen, Hans Chr.: *Carl August Struensee: Reformert or traditionalist?*, "Scandinavian Economic History Review", 7:2, 1969, ss.179-198.
- Johansen, Hans Chr.: "Some Aspects of Danish Rural Population Structure 1787", "Scandinavian Economic History Review", IX, 1972.
- Johansen, Hans Chr.: *En samfundsorganisation i opbrud*, Dansk socialhistorie Bd.4, K.1979.
- Jørgensen, Frank og Westrup, Morten: *Dansk centraladministration i tiden indtil 1848*, K. 1982.
- Jørgensen, Poul Johs.: *Dansk Retshistorie*, K.1965.
- Langen, Ulrik: *Den afmægtige –en biografi om Christian 7*, K. 2008.
- Langen, Ulrik: *Struensee -100 danmarkshistorier-*, Århus, 2018.
- Larsen, Joachim: *Bidrag til Den danske skoles historie*, Bind I, K.1984.
- Lausten, Martin Schwarz: *Kirkens historie i Danmark - pavekirke, kongekirke, folkekirke-*, K. 2018.
- Lomholt-Thomsen, Johs: *Kilder til Danmarks historie efter 1660*, Bind II, *Historielærer-foreningen*, Gyldendal, K.1973.

-
- Lyngby, Thomas, Søren Mentz og Sebastian Olden-Jørgensen: Magt og pragt –Enevælde 1660-1848–, K.2010.
- Løgstrup, Birgit: Bundet til jorden. Stavnsbåndet i praksis 1733-1788, Odense,1987.
- Nystrøm, Eiler(udg.): Luxdorphs Dagbøger I (1745-73), K.1915-30.
- Olden-Jørgensen, Sebastian: ”Struensee-Affæren 1770-72” i Thomas Lyngby (mfl. red.) ”Magt og Pragt”, K. 2010, ss.184-215.
- Ottosen, Johan: Vor Historie II, K. 1904.
- Petersen, Kai: Danmarkshistoriens hvornår skete det, K.1985.
- Reverdil, Élie Salomon François: Struensee og det danske Hof 1760-1772, oversat af Paul Læssøe Muller, indledning og anmærkninger af Louis Bobé, K.1917.
- Rockstroh, K.C.: Udviklingen af den nationale Hær i Danmark II-III, K.1916-26.
- Schou, J.H. m.fl.: Schous Forordninger I-XXII, K.1777-1840.
- Scocozza, Benito: Danmarkshistoriens hvem, hvad og hvornår, K.1996.
- Scocozza, Benito: Politikens bog om Danske Monarker, K.1998.
- Skipper, Jon Bloch (red.): Danmarkshistoriens Årstal, Achehoug og Det Historiske Hus, K.2001.
- Skrubbeltrang, Fridlev: Det danske Landbosamfund 1500-1800, K.1978.
- Thaulow, Th. og J.O. Bro Jørgensen (udg.): Udvalgte Breve, Betænkninger og Optegnelser af J.O. Schack-Rathlous Arkiv 1760-1800, K.1976.
- Tillyardm, Stella: En kongelige affære. Caroline Mathilde og hendes søskende, K. 2007.
- Østergaard, Rasmus Thestrup: Enevældens tid, systime, Århus,2018.
- 佐保吉一「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究(1)ーフレデリック4世治世(1699-1730年)を中心にー(上)」『東海大学文化社会学部紀要』第5号、2021年。
- 佐保吉一「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究(2)ーフレデリック4世治世(1699-1730年)を中心にー(下)」『東海大学文化社会学部紀要』第9号、2023年。
- 佐保吉一「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究(3)ークリスチャン6世治世(1730-1746年)を中心にー」『東海大学文化社会学部紀要』第10号、2023年。
- 佐保吉一「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究(4)ーフレデリック5世治世(1746-1766年)を中心にー」『東海大学文化社会学部紀要』第11号、2024年。